

図書館司書課程におけるマンガ資料論（その 1）

An Argument on Manga as Library Materials in Librarian Course (1)

東野善男

HIGASHINO Yoshio

【要約】

本稿では、司書課程における科目「図書館情報資源特論」という授業実践を通して、選択科目としてのマンガ資料論の意義について論じる。複数回に分ける必要があるため、今回は第一弾となるが、漫画の歴史、漫画という言葉の定義、漫画を資料として保存している施設とその名称を確認するところからはじめる。また、司書課程としての科目という点を考慮すると、学生の学修成果が問われる。この科目は、最終的に話せて書けるようになるという目標を持ち、最終試験ではその両方を問うことにしてきた。これまでの 8 年間（2012-2019）の授業実践の歩みとあわせて、その内容を振り返ることとする。

キーワード 司書課程 図書館情報資源 マンガ 漫画 まんが

1. はじめに

平成 14 年（2012）、筆者は司書課程において図書館の資料を説明する機会を得た。その準備段階で、受講生にとって興味深い内容とは何かを思案したところ、「マンガ」という題材に思い至った。その理由は、若い世代に人気があっても図書館には置かれていないという実にアンビバレントな存在であるからである。と同時に、「個々の好みと選書とは別である」と言った図書館側の一方的な考え方を押し付ける授業内容にはしたくないという強い思いがあった。

マンガと言えば、出版界の進んだ働きかけ^(注 1-1)もあり、多くの人にとって身近な読み物となって来ている。昭和時代の終わりには、「マンガは本と比べると低位のものだ」^(注 1-2)と言われていたが、30 年以上経過しても相変わらずの図式が存在しているのではないだろうか。それ以上に、図書館との関係性^(注 1-3)で言えば、あいも変わらず限定的なままである。

近年は中学高校などの学校現場において、マンガを教育に活用する事例は増えている。中学校学習指導要領^(注 1-4)をはじめとして、入学試験^(注 1-5)に出題されることもある。

今振り返るとこの題材は実に有益で、これまで多くの受講生と授業の中でマンガと図書館の関係性について考えることができた。全ての授業に共通したテーマとして「図書館にマンガを置くこと」について議論をした。

そこで、本稿をスタートに数回に分けて、授業実践を通じ考えてきた選択科目としてのマンガ資料論の意義について論じたい。

2. マンガとは何か

マンガ資料論では、マンガと図書館について考える前に、マンガとは何かをひもといており、本稿でもその順序で始めたい。そこで、近代以前の江戸時代を皮切りに、明治時代までを歴史的に辿ってみる。

歴史を振り返るにあたり、清水（1999）、竹内（2016）両資料を基にして【表 1】を作成した。まとめる際、授業中に参照しやすいように、主にデジタルデータを調べ、所蔵館と URL を付記している。

資料番号	時代	年	著者名	書名	所蔵館	URL
①	江戸	1720	竹原春潮齋 (生没年不詳)	鳥羽繪欠び留 (トバエ アクビドメ)	京都府立京都学・ 歴彩館 (デジタル データ)	http://opacs.pref.kyoto.lg.jp/mylimedio/search/book.do?bibid=515456
②	江戸	1814	葛飾北斎 (1760-1849)	北斎漫画	国立国会図書館 (デジタルデータ)	https://iss.ndl.go.jp/books/R100000039-I001467970-00
③	江戸 ～ 明治	1862 ～ 1887	チャールズ・ワグマン (1832-1891)	ジャパン・パンチ	国立歴史民俗博物館図書室 (復刻版)	https://myrp.maruzen.co.jp/press/punch/index.html 雄松堂出版 (2018 オンデマンド版)
④	明治	1877 ～ 1907	野村文夫 (1836-1891)	团团珍聞	国立国会図書館 (デジタルデータ・館内限定資料)	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11209950
⑤	明治	1901 ～ 1908	宮武外骨 (1867-1955)	滑稽新聞	愛知教育大学附属 図書館他 (復刻版)	https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN10198045 ゆまに書房(1993.12-1994.3)
⑥	明治	1905 ～ 1912	北澤楽天 (1876-1955)	東京パック (第一次)	国立国会図書館 (デジタルデータ・館内限定資料)	https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2895882

【表 1】 漫画の歴史 (江戸～明治)

2.1. 漫画の歴史

漫画のルーツを辿り、その源泉がどれに相当するかと問われることがある。一般的に 12 世紀の絵画 (絵巻物) まで遡り、鳥獣人物戯画^(注 2-1) とする答えが多い。

ただし、山下^(注 2-2) は、「戦後のマンガ家のほとんどにとって、日本美術 (とくに古美術)

は、映画や文学に比べて、はるかに遠い地点にある。手塚治虫を評価するとしたらマンガを美術から切り離れたことにある」と記している。

2.1.1. 江戸時代

江戸時代中期(享保期)に、大都市大坂にあった版元^(注 2-3)が木版刷りによる鳥羽絵を売りだした。大衆向けの商品^(注 2-4)として量産される漫画本の登場である。この「鳥羽絵」本は、【表 1】①をはじめとして、多くの種類が大坂から全国に広まった。人々は戯画風の絵のことを「鳥羽絵」^(注 2-5)と呼ぶようになり、現代の漫画を意味する言葉として大正時代^(注 2-6)まで使われるようになる。今でも複数の公共図書館が所蔵しており、デジタルデータ化されているためインターネット上でも確認できる。

江戸時代後期には、葛飾北斎^(注 2-7)によって『北斎漫画』(全 15 編)が刊行される。文化 11 年(1814)に名古屋にあった版元^(注 2-8)が初編を発行し、文政 2 年(1819)までに 10 編、その後 11 編から 15 編まで追加刊行されたベストセラー本である。数千点からなる葛飾派門人向けの絵手本(画題と画法)^(注 2-9)であると同時に図典、つまり知識啓発のための百科図彙^(注 2-10)である。ストーリー性を持たせず気の向くままに漫然と描いたという意味から漫画^(注 2-11)という言葉が生み出された。これが漫画という言葉のルーツと考えられている。

幕末文久 2 年(1862)には、横浜居留地でチャールズ・ワグマンによって、風刺雑誌『ジャパン・パンチ』が創刊された。和とじの英文定期刊行物(月刊誌)で、居留外国人を読者対象とし、明治 20 年(1887)まで続いた。同誌では、母国イギリスの雑誌「パンチ」^(注 2-12)をまねて、時局風刺画^(注 2-13)をしばしば使っている。

2.1.2. 明治時代

文明開化の明治時代初期まで時代が進むと、パンチという言葉は、「ポンチ」となまって使われ、「鳥羽絵」とならび、現代の漫画を意味する言葉として広がる。

明治時代前半は自由民権運動が盛んになり、言論による反政府運動の中に、漫画も大いに加わった。そのひとつとして、明治 10 年(1877)、風刺雑誌『团团珍聞(まるまるちんぶん)』が週刊誌として創刊された。自由民権運動の広がりとともに発行部数^(注 2-14)を増やしていたが、短時間に雑誌や新聞を印刷できる技術^(注 2-15)と、それを販売できる流通網が整備されたという背景もある。明治 29 年(1896) 3 月 21 日号^(注 2-16)には、連載によるストーリー漫画(複数コマの物語漫画)が登場する。田口米作^(注 2-17)の 6 コマ漫画であった。

その後、自由民権運動の終焉とともに、「ポンチ」の風刺画としての意味は弱まっていく。それに代わる新しい言葉として、明治末期に「漫画」^(注 2-18)が現在の意味に近い形で使われ出したのである。

明治 34 年(1901)、宮武外骨が漫画雑誌『滑稽新聞』(月 2 回刊)を大阪で創刊した。慶応 3 年(1867)に讃岐に生まれた宮武外骨は、少年の頃から『团团珍聞』の大ファンであり、自由民権運動の支持者であった。明治時代中期からの漫画雑誌創刊ブームは、この雑誌の大

ヒットがきっかけとなっている。

東京では明治 38 年(1905)、『時事新報』の漫画担当記者である北澤楽天^(注 2-19)によって漫画雑誌「東京パック」(旬刊)が創刊された。日本初の全ページカラー印刷、さらに全ページに漫画が掲載されるという画期的なスタイルでベストセラーとなる。楽天がこの雑誌を維持・拡大するために積極的に弟子を育てたことが、この後大正期に漫画家を増大させるきっかけとなった。

2.2. 漫画の表記

漫画は、時代とともに「鳥羽絵」「ポンチ」と移り変わってきたことは前節で見たとおりである。時を経て昭和 30 年代には「劇画」^(注 2-20)、昭和 50 年代には「コミック」という言葉へと推移していく。

2.2.1. 漫画という言葉の起源

中国^(注 2-21)にはもともと漫画という言葉はなく、日本^(注 2-22)で生まれた独自のものである。『北斎漫画』^(注 2-23)でも分かるように、江戸時代には漫画という言葉は存在するが、その意味は「スケッチ」と同等で、今とは異なっていた。現代の漫画の持つ意味合いを最初に持たせたのは、今泉一瓢(いまいずみ いっぴょう)^(注 2-24)である。イタリア語で「誇張」を意味する「カリカチュア(諷刺画)」の訳語として「漫画」という言葉を『時事新報』の明治 23 年(1890) 2 月 6 日号^(注 2-25)で使っている。

2.2.2. 表記による違いは何か

漫画には、「まんが」、「マンガ」という表記の違いがある。朝日新聞記事検索サービスを使用して 3 つの表記を検索(発行日:2018 年 1 月 1 日から 1 年間)してみると、漫画 2,215 件、マンガ 551 件、まんが 171 件となり、ひらがなによる「まんが」は他の 2 表記と比較するとあまり使われていない^(注 2-26)ことが分かる。また、「漫」という字は学習漢字^(注 2-27)に含まれていないため、子ども向けの表記は、ひらがなの「まんが」あるいはカタカナの「マンガ」となる。

夏目^(注 2-28)によると、明治～戦前までのものを「漫画」、戦後のものを「マンガ」と表記するのは、単に習慣でそれほど意味はない。一方で、清水^(注 2-29)はマンガを現代的な意味として、他とは区別して使っている。

2.3. 全国各地のマンガ関連施設 マンガミュージアムと図書館

平成 18 年(2006)頃から全国各地にマンガを収集し、保存する図書館や博物館^(注 2-30)が増えているが、授業では、特に次の 3 館について詳しく紹介し、漫画表記の違いも含め比較してきた。各館の詳細は次回以降に書くこととする。

① 京都国際マンガミュージアム(京都府)

②広島市まんが図書館（広島県）

③北九州市漫画ミュージアム（福岡県）

今後は、富山県内のマンガ関連施設（藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー（高岡市）、氷見市潮風ギャラリー（氷見市））にも焦点を当て、富山県の地元資料も含めた内容としたい。

3. 漫画と図書館司書課程科目「図書館情報資源特論」

マンガで図書館資料を考えるということは、決してマンガそのものを論じる訳ではない。いわゆる作家論でもストーリー論でも、ましてやマンガの描き方を学ぶわけではない。学生が科目選択をする際に取り違えることを避けるため、シラバスの概略には「漫画論ではない」と表記している。マンガ資料論では、図書館の資料のあり方というテーマを追求する^(注 3-1)ためにマンガを題材として使う。考えるきっかけとなるマンガ関連文献(特に新聞記事)は、毎年発行されるため、授業準備は欠かせない。紹介する文献が、できるだけ新しく、毎回の授業の講義内容と一致している点も受講生の興味を維持する点では重要である。

また、マンガが図書館資料としてふさわしいかどうかを考察するプロセスにおいて、筆者自身も固定観念を抜きにして図書館資料のあり方を見つめ直すように心がけている。ひいては授業を進める中で図書館の課題そのものが浮き彫りになり、受講者全員で図書館のあり方そのものを考察することにもつながる。

3.1. これまで実施した授業一覧

これまで実施した授業は【表 2】のとおりである。九州産業大学^(注 3-2)と富山短期大学^(注 3-3)は司書課程の授業、別府大学^(注 3-4)は司書（もしくは司書補）講習である。

	【講師経験】	【開講年度】	【科目名】
①	九州産業大学非常勤講師	平成24年度（前期）	図書館情報資源特論
②	九州産業大学非常勤講師	平成25年度（前期）	図書館情報資源特論
③	九州産業大学非常勤講師	平成26年度（前期）	図書館情報資源特論
④	九州産業大学非常勤講師	平成27年度（前期）	図書館情報資源特論
⑤	別府大学司書講習会講師	平成27年9月21日～22日	図書館情報資源特論B（マンガ資料論）
⑥	九州産業大学非常勤講師	平成28年度（前期）	図書館情報資源特論
⑦	九州産業大学非常勤講師	平成29年度（前期）	図書館情報資源特論
⑧	別府大学司書補講習会講師	平成29年8月16日、19日	図書館特講（マンガ資料論）
⑨	富山短期大学准教授	平成30年度（後期）	図書館情報資源特論
⑩	富山短期大学准教授	令和元年度（後期）	図書館情報資源特論

【表 2】 授業一覧

司書課程の科目名は「図書館情報資源特論」のため、漫画の表記については検討する必要

がない。別府大学での司書講習のように、あえてマンガ資料論と表記する必要がある際には、漫画ではなく、まんがでもなく、マンガを使う。その理由は、内容が歴史的な資料について考察するだけでなく、現代の図書館資料論を目指した点にある。

3.2. 講義実施回数別に見た講義内容の特徴

講義の内容を【表 3】のとおり項目別に一覧にし、年度内に一度でも実施した場合は網掛け表示にしている。学習目標である図書館にマンガを置くことの是非を考察するために必要とされる方法を準備している。ここでは、3 項目のみ具体的な内容を紹介する。

実施年（平成 24 年～令和元年）	24	25	26	27	27	28	29	29	30	1
実施場所（県別）	福 岡	福 岡	福 岡	福 岡	大 分	福 岡	福 岡	大 分	富 山	富 山
受講者数（人）	25	13	20	13	36	12	39	14	13	19
実施項目										
紙資料配布（毎回授業時）										
小テスト										
レポート										
グループワーク（5～6 人/1 グループ）【3.2.2】										
プレゼンテーション（全員対象）										
プレゼンテーション（グループ対象）										
参考文献配布（最終レポート用）【3.2.3】										
写真（パワーポイント）										
映像資料										
学外授業（北九州市漫画ミュージアム）【3.2.1】										

【表 3】 講義内容の特徴

3.2.1. 学外授業

筆者が実際に訪問した図書館やマンガ関連施設について教室で説明する際は、パワーポイント使って、写真を多く取り入れることで、受講者に視覚的なイメージを与えるようにしてきた。ただし、それだけでは、せいぜい機会があれば行ってみたいと思う程度の興味しか生じない。近くに施設があれば積極的に訪問したいところである。なぜならば学外授業として見学し、職員による説明が加われば、多様な情報資源の実情を体感することができる。現場で働いている人の声を直接聞く体験は、学外授業特有であり、個人で訪問したとしても、なかなか実現することではない。実際に施設をその目で見て確かめ、その上職員にインタビューや質問をする機会を得られれば、そこで働く上で、どういった問題を抱えているかを実感し、理解しやすい。

学外授業は通常 1 回を想定しているが、もう一回ぐらいあっても良いという感想をもらうこともある。

3.2.2. グループワーク

グループワークは、苦手だという受講生もいる。なぜなら 5～6 人の少人数の前でも人前で話すことに抵抗を感じる人もいるからだ。だが、ひとつのテーマについてグループで発表することで、自分以外の人間の様々な意見を聞くことができる。同じ司書（あるいは司書資格取得）を目指す者同士だからこそ、自分とは異なる考えに触れ、司書としての視野を広げられるように、意見交換していくことを期待している。

また、授業の限られた時間の中では、持ち時間を定め計測した上で発表させている。定められた時間内に自分の考えを述べるという経験を積むことで、今後人前で話す機会があれば十分な自信と能力になる。あるいは、今回のことが不十分と感じたなら、それを踏まえて改善につながる。

3.2.3. 参考文献配布

最終レポートを作成する際の参考文献を事前に用意し、あえて配布するようにしている。それは、参考文献を集める意義について気づかせることを意図している。授業の回数を重ねて、マンガについてその歴史を知り、それが地域にどう根付いているのか、世界とどうつながっているのかを楽しく、そして興味深く学ぶ。そして最終レポートのため、ただやみくもに資料を収集することを指示されるだけでは、受講生にとってははじめの一步が踏み出せない。配布資料を何らかの足がかりとして、参考文献として活用し、最終レポート作成を目指すようにしている。結果として、それは文献収集の能力向上だけではなく、参考文献としてアウトプットに活かす経験にもつながっていくと考える。また、授業で配布されるような資料を、今後は能動的に収集できるようになることを目指している。

残念ながら用意された参考文献が自分の発表には使いづらく、発表にあった記事を自分で集めたほうが良いと感じたとすれば、次回はオリジナル性の高い発表が期待できる。書誌事項をパワーポイントスライドの下に常に表示し、自ら資料を手に入れるようになることを目指し、強い姿勢を終始示している。

4. 図書館司書課程科目「図書館情報資源特論」についての考察

選択科目「図書館情報資源特論」の内容は、地域資料論として開講する事例もある。だがあえてマンガ資料論を取り上げた意義は、受講生にとって興味深い内容であるという点が筆頭にあげられる。参考文献を見ただけでも、「今を語っている」という魅力がある。また以下の文献（いずれも『北日本新聞』）のようにマンガ資料は地域資料も兼ねていることが少なくない。

「ドラ電台湾人客のびた」（2018 年 3 月 29 日）

- 「卒論漫画で易しく」(2018年4月12日)
 「鶴谷さん初の漫画単行本」(2018年6月29日)
 「アニメとマンガで地域を学ぶ①」(2018年7月7日)
 「南砺に論文で恩返し」(2018年8月21日)

地域資料について言えば、他の科目でも扱う材料である。例えば、科目「情報資源組織演習」では、新聞記事から地域資料を探し、書誌事項を記録し、分類記号を付与する。科目「情報サービス演習」では、参考図書を使用し、あるいはデータベースを検索し、地域に関する質問に回答する。科目「図書館情報資源概論」では、図書館にある資料を幅広く学ぶ。それらは印刷資料から非印刷資料、更にはネット資料まで含まれる。以上のことから地域資料を選択科目として特別に扱うのではなく、司書課程全体の共通テーマとして幅広く論じていくべきと考える。むしろマンガと図書館について考え、選択科目としての授業内容に特徴を持たせた上で、話せて書ける図書館員^(注 4-1)を目指している。

科目「マンガ資料論」第1回授業では、マンガとは何かをひもとき、漫画の異表記に気づかせ、施設名の表記へとつなげている。まさにマンガと図書館について考えるきっかけの授業である。「まちやひとのことを知らないで、良い図書館員にはなれない」との思いを込めて、第2回以降の授業では、図書館とマンガをとりまく社会事象について、視聴覚教材をふんだんに使って分かりやすく、そして、刺激的に紹介している。

5. おわりに

今回は、漫画の歴史、漫画という言葉の定義、漫画を資料として保存している施設とその名称を確認するところから始めた。

次回以降は、マンガ関連施設、現代文化とその影響(国内編)、まちおこし(聖地巡礼・メディアミックス)、マンガが与える影響、図書館事例紹介(公共図書館・学校図書館)、出版流通、選書、図書館の自由、現代文化とその影響(海外編)、クールジャパン、サブカルチャーと続く。あくまでも研究態度が漫画化^(注 5-1)している訳ではない。

複数回に分けた原稿提出が完了する時点で、司書課程における選択科目としてのマンガ資料論の意義が正しく伝わるよう継続的な取り組みを続けていく。

(注)

1-1 朝日(2019)

「お堅くない、大学出版会 漫画や絵本…専門知識わかりやすく」

硬派な学術書を出しているイメージのある大学出版会から、漫画本や絵本、受験生向けの大学ガイド本など、これまであまりなかった書籍が登場している。一般の読者がより興味を持ちやすいよう、タイトルや構成を工夫した本も多い。

1-2 筑紫(1985) 42 p

1-3 津野 (1998) 338 p

マンガ本の生命はきわめてみじかい。読みたいと思ったときには、もう書店からすがたを消してしまっている。となれば、ここは本の生命をながびかせる図書館の力にたよるしかない。それなのに、なぜか公共図書館はマンガには冷淡なままなのである。いつまでもそうしているわけにはいかないのはわかりきっている。公共図書館はマンガ本について、そろそろきちんとした見解をだすべきだろう。

1-4 吉村 (2008) 1-2p

中学校学習指導要領「美術」の節「第二学年及び第三学年」向けに、「表したい内容を漫画やイラストレーション、写真・ビデオ・コンピュータ等映像メディアなどで表現すること」の一文が入ったのは、1998年(平成10)のこと(施行は2002年度より)。要するに、教育現場へのマンガの導入を国が認めたわけである。これは、マンガに対する社会的認知の変化を象徴する出来事として話題となった。もちろん、公的な認可を待つまでもなく、マンガを授業で使用したり学校図書館に配架したりする試みは以前からあった。とはいえ、「お墨付き」の効果は小さくなかったようである。いまや、マンガに関する記述が国語の教科書に載り、学校や地域の図書館では当然のようにマンガが並び、行政主導でマンガを用いた人材育成やコンテンツ開発が推進される時代となった。

1-5 朝小 (2019) 6 p

「アンケート」を題材にしたのが埼玉・淑徳与野中です。図書館にマンガを置くことに対して議論になり、生徒にアンケートをするという設定で、示されたアンケート案についての出題。アンケート案の問題点を一つ挙げ、その内容を説明させました。(中略)さらに、受験生自身に対しても図書館にマンガを置くことに賛成か反対かを問い、どちらかの立場を選ばせて理由を記述させました。

2-1 清水 (1991) ip

鳥獣人物戯画は「鳥獣戯画」ともいわれ、4巻から成っている。それらは平安後期から鎌倉前期にかけて制作されたものだという。とくに甲巻は擬人化された蛙・猿・兔などが登場し、その描写の見事さと諷刺の卓抜さで日本漫画の原点ともいえるべき傑作である。

2-2 山下 (1998) 84p

2-3 清水 (2019) ip

江戸中期、大阪は出版文化の中心地(江戸中期は京都、江戸後期は江戸に移る)で、相当数の版元(出版社)や出版物の販売店が整いはじめていた。すなわち、戯画本を出版する基盤ができていたのである。

2-4 清水 (1991) ip

平安後期から室町後期にかけては「餓鬼草紙」など戯画史上で見のがせない名作が生み出された。だが、こうした肉筆絵巻はごく限られた人々が楽しんだにすぎない。漫画が民衆のものになるのは、版画技術を利用した複製美術として出されるようになってからである。

2-5 清水 (1991) ip

鳥獣人物戯画の作者と伝えられる鳥羽僧正の名は、江戸期に登場する戯画スタイル「鳥羽絵」の語源となり、近世から近代の社会において現代の「漫画」を意味する言葉として使われていた。

2-6 清水 (1991) 166p

人物を手長・足長（あるいは手細・足細）に誇張し、躍動感を出そうとした表現スタイルである。それは線と形の遊びを志向する近代漫画、とくに二十世紀初頭に世界的に流行するナンセンス漫画の表現形式にきわめて近い。戯画表現の中に近代の息吹きが立ち込めている。それは世の中が落ち着き、絵師の心の中に自由に空想をめぐらすゆとりが出てきた証しである。

2-7 隠岐 (2019) 23p

彼はまだ少年の頃に、とある江戸の大きな書店の店員となったが、絵入り本に見入ってばかりで、店員仕事をひどく面倒くさそうにいやいやこなしたので解雇されてしまう。書店で絵入り本をめくり、幾月も絵と接して暮らしたことが、この若者の心に、描くことへの情熱を呼び覚ました。

2-8 隠岐 (2019) 115p

非常に特異な才能の絵師北斎は、西国を旅してのち、私たちの町(名古屋)に立ち寄って、我らの友人墨僊と知り合いになり、彼と描画について話し合うのを楽しんだ。この会話の中で、北斎は 300 枚を超える素描を描いてみせた。そこで、我々は、こうした彼の絵画談義が絵を学ぶ者すべてに有益であってほしいと願い、これらの素描を一冊の本にして出版することにした。そして北斎にどんな題名をつけたらよいか尋ねたところ、彼はただ「漫画」と答えたので、この一冊を「北斎漫画」と題することにした。「漫」とは文字どおり、考えの赴くままという意味であり、「画」は素描のことであるから、この題名の意味するところはおそらく、「思いつくまま出てきた素描」ということになるだろう。

2-9 芸術 (1989) 12p

弘法は筆を選ばず。北斎は画題を選ばず—北斎は写実を越えて、形をもたぬもの、さらに目に見えぬものにも挑む。例えば風—風そのものには絵にはならない。だが、北斎は、風によって起きる“見える現象”を描くことで見る者の経験に訴え、そこに風が吹いていることを暗示し、風を見せた。これはもはや心理学の領域である。見えぬものを見せようとした北斎の執念は、「絵」そのものの観念に対する挑戦であったといえよう。たなびく経文や傘を枠からはみ出させて配したあたりに、デザイナー・北斎のセンスが光る(風 第十二編)

2-10 芸術 (1989) 20p

2-11 有泉 (2010) 7p

2-12 清水 (1991) 34p

ワーグマンはロンドンに生まれ育った。9歳の年(1841年)、そのロンドンに『パンチ』(Punch, or the London Charivari) という週刊漫画雑誌が創刊される。彼は、この雑誌を少年時代から愛読していたものと思われる。

2-13 竹内 (2016) 4p

2-14 清水 (1991) 54p

表 1 『団団珍聞』 発売所の全国的広がり (明治 10-14 年) より。創刊時の売捌所 (うりさばきじょ) は東京、群馬、横浜、千葉、大阪、甲府、佐賀、長野、合計 33 か所であった。5 年後には、創刊時の 10 倍 (323 か所) になっている。売捌所が多い県としては、栃木、群馬、千葉、神奈川、静岡、兵庫などがあり、自由民権運動の活発な地区と一致している。5 年間に売捌所が設けられなかったのは、秋田、富山、鳥取、宮崎、沖縄の 5 県で、交通・運輸の未発達地区と一致している。

2-15 清水 (1999) 18p

江戸時代に漫画は木版画として量産され大衆のものとなった。これらは版木や浮世絵の一ジャンルとして描かれたものである。明治時代に入ると、新聞、雑誌といったジャーナリズムが登場し、そこに亜鉛凸版印刷など大量印刷が可能な技術が導入され、瓦版に代表される江戸風ミニコミから近代的マスコミに発展していった。漫画はこうした新聞、雑誌に発表の場を得て急成長していく。

2-16 清水 (1991) 109p

2-17 清水 (1999) 27p

田口米作 (たぐちべいさく 1864-1903) は、『団団珍聞』で才能を発揮した小林清親 (こばやしきよちか 1847-1915) の門下生で、日清戦争期あたりから戦争を題材にした錦絵で次第に注目されるようになった人気画家である。

2-18 倉持 (2015)

2-19 竹内 (2016) 10p

北澤楽天は『時事新報』で政治漫画や連載漫画を描くだけでなく、主宰誌『東京パック』(1905 年創刊) で活躍し、人気漫画になっていく。そして、漫画で定期収入が得られることで日本発の職業漫画家になるのである。

2-20 雑賀 (2019)

「二五歳以下を“劇画世代”というのだそうだ」。1970 年 2 月の「サンデー毎日」に掲載された「ルポルタージュ 劇画繁栄」は、このような書き出しで始まっている。記事の冒頭でとりあげられるのは、新宿の書店にマンガ雑誌を求めて立ち寄る当時の若者たちの姿だ。「午後の客層は二十歳前後の若者。学校帰りの高校生、大学生。そして髪を伸ばしたフーテン・スタイルの芸術青年らしき男たち。(中略) 夕方から仕事を終えたサラリーマンふうの人が立ち寄り始める。学生たちが買うものに加えて『漫画サンデー』や『漫画アクション』など大人向きのマンガ誌がよく出ていく。『漫画アクション』といっても、内容はほとんど劇画だ」「マンガ」が幅広い年代へと浸透した現在では、最後の一文には注釈が必要だろう。「漫画」という言葉は、この時代はまだ従来の大人向け風刺漫画や児童漫画の領域と結びついて用いられてもいた。それに対し、50 年代末に貸本というメディアの中で生まれた「劇画」という言葉は、60 年代には週刊少年誌・青年誌といった新たなメディアと共に拡大し、70

年代を迎える頃にはこうした若者たちにとっての新たな視覚表現のジャンルを指すものとなり、大衆的な娯楽へ成長していく。

2-21 清水 (2001) 53p

中国では漫画(まんかく)という「へらさぎ」(鳥の漢名)を意味する言葉は存在した。

2-22 清水 (1991) 17p

中国には、「そぞろかき」あるいは「随筆」を意味する「漫筆」という言葉があったから、この言葉から日本人が「漫筆→漫筆画→漫画」というように派生語としてつくり出したのではないかと私は推測する。

2-23 宮原 (2001) 132p

ヨコタ村上孝之「コラム マンガ、漫画、コミックス」

北斎その人が「漫画」語をどこから取ってきているかは判然としない。自序には「題するに漫画を以てせるは翁がみずから言えるなり」と主張しているが、真偽は不明である。湯本豪一『江戸漫画本の世界』によれば、北斎以前にも 1771 年に鈴木煥卿(スズキ、カンケイ)という人の書いた『漫画随筆』(ただし、読み方は「まんかく」というものがあり、さらには中国宋代にもこの言葉が見られるという。いずれにせよ、北斎がこの言葉が自分のオリジナルだと言わなければならなかったほど「漫画」の語は一般的ではなかった。

2-24 吉村 (2008) 57p

2-25 吉村 (2008) 58p

時事新報では、創刊(明治 15 年)間もなくから「漫言」と題する記事欄があることを一瓢は知っていたから、その絵画版として「漫画」という言葉が自然とうかんだのだろう。社告には「来る 11 日に一頁大の寓意漫画を発表する」とある。その記念すべき「漫画」の第一号を担当したのは小林清親である。当時、『团团珍聞』に辛辣な諷刺画を描いていた第一人者というべき絵師であった。憲法発布一周年の日に描かれたこの寓意漫画は「内外の荒波を国民が一致団結して乗り越えよう」と日本を船にたとえて出張したものである。

2-26 野田 (2013) 187p

ひらがなによるまんがを採用するひとは、いまではそれほど多くない(数少ない例外に大塚英志がいる)。それは、とりわけ格助詞の「が」がまんがの「が」と衝突するためであり、漢字仮名交じり文中における名詞の埋没をさける意識がはたらくためだろう。

2-27 岩国 (2019) 248p

常用漢字のうち、義務教育期間に読み書きを学習する漢字。学年別漢字配当表に示され、小学校段階で提示される。教育漢字。

2-28 夏目 (2004) 219p

2-29 清水 (1984) 11p

「漫画」と「マンガ」に分ける方法がある。すなわち、現代社会で育ってきた劇画・コミック・アニメ・アニメCMなどを「マンガ」と総称し、伝統的な一枚絵、コマ漫画・短いストーリー漫画などを「漫画」と総称するのである。

2-30 朝日 (2017)

近年、漫画の収集・保存・閲覧で大きな役割を果たしているのが、個人コレクションを託された大学図書館や、図書館と美術館の両方の機能を持つ「ミュージアム」形式の施設だ。06 年開館の京都国際マンガミュージアムをはじめ、北九州市などで、続々と誕生している。地域活性化の拠点や、高齢化する愛好家の漫画コレクションの受け皿になっているほか、各館が連携して、漫画の共同企画展も開いている。どの漫画を、どこで収蔵しているかが検索できる国のデータベースづくりも進んでいる。

3-1 宮原 (2001) 27p

3-2 九州産業大学

3-3 富山短期大学司書課程

3-4 別府大学 司書 (もしくは司書補) 講習

4-1 糸賀 (1997) 239p

司書がなかなか対外的にアピールできない (あるいは、アピールをしようとしな) ことでは、実は司書ばかりを責められない部分もある。その一つが司書の養成課程にある。大学で履修するにせよ、司書講習で取得するにせよ、講義中心であって、みずから問題意識をもって「話せて書ける」ゼミ形式が司書課程にあるケースは少ない。

5-1 広瀬 (1968) 3p

万葉の贈答歌のなかにカケアイ漫才のような応酬があることは事実である。しかし、研究対象が漫才的であることと、これを研究する態度が漫才的であることは全く別のことである。たいせつなことだから、くりかえしていう。漫才も学問的研究の対象になる。しかし、研究方法が漫才化することは断じて許されない。氏は、私が「冷笑した」といわれるが、私は冷笑したのではない。学問の畑が漫才的酔夢によって踏み荒されたことを激しく憤り、深く憂えたのである。

(参考文献)

【図書】

清水勲『コラム・漫画館—諷刺と遊び』(1984 駸々堂出版)

清水勲『漫画の歴史』(1991 岩波書店)

清水勲『図説漫画の歴史』(1999 河出書房新社)

宮原浩二郎編『マンガの社会学』(2001 世界思想社)

清水勲『日本近代漫画の誕生』(2001 岩波書店)

夏目房之助『マンガ学への挑戦』(2004 山川出版社)

吉村和真編『マンガの教科書 マンガの歴史がわかる 60 話』(2008 臨川書店)

有泉豊明『北斎漫画を読む 江戸の庶民が熱狂した笑い』(2010 里文出版)

竹内オサム、西原麻里編著『マンガ文化 5 5 のキーワード』(2016 ミネルヴァ書房)

清水勲、猪俣紀子『日本の漫画本 300 年』(2019 ミネルヴァ書房)

エドモン・ド・ゴンクール著、隠岐由紀子訳『北斎：十八世紀の日本美術（東洋文庫，897）』（2019 平凡社）

【雑誌記事】

筑紫哲也「一冊の本をめぐる」『世界 1985年5月号』41-45p

「特集北斎 その壺漫画篇」『芸術新潮 1989年3月号』6-25p

糸賀雅児「話せて書ける」図書館司書を！『図書館雑誌 1997年4月号』236-240p

津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌 1998年5月号』336-338p

山下裕二「マンガ・美術・批評をめぐる透視図--境界意識の不毛（特集マンガ 二次元の総合芸術）」『美術手帖 1998年12月号』77-84p

野田謙介「とあるMの定義と起源」（総特集 世界マンガ体系）『ユリイカ 2013年3月臨時増刊号』183-192p

【新聞記事】

広瀬誠「研究方法の漫才化」『北日本新聞 夕刊』（1968年4月24日 3面）

倉持佳代子「(いまだきマンガ塾)「大衆メディア」への道 江戸戯画から漫画まで、発展の足跡追う」『朝日新聞 夕刊（大阪版）』（2015年11月27日 7面）

「1997年 漫画専門の公立図書館、誕生 市民が育てる身近な文化」『朝日新聞 夕刊』（2017年6月21日 4面）

「お堅くない、大学出版会 漫画や絵本…専門知識わかりやすく」『朝日新聞 朝刊』（2019年3月12日 29面）

「中学入試 大学入試改革が影響 多様な出題で思考力問う」『朝日小学生新聞』（2019年3月29日 6面）

雑賀忠宏「(いまだきマンガ塾) 全世代に劇画花火を 急逝のマンガ原作者・小池一夫の願い」『朝日新聞 夕刊（大阪版）』（2019年6月25日 3面）

【インターネット】（参照日：2019年12月20日）

九州産業大学のサイト：<https://www.kyusan-u.ac.jp/campus/qualification/>

資格取得の課程 実社会において自身の能力を証明する手段のひとつが資格です。本学では、資格取得をサポートする充実した体制が整っています。

本学が開設している資格取得の課程は、5つに分かれています（うち1つは国際文化学部のみ開設）。資格取得を希望する学生は通常の授業とは別に、各課程の授業科目を履修し、単位を修得することが必要となります。

司書及び司書教諭

司書は、大学図書館・公共図書館で図書などの資料の選択・収集・整理・分類・貸出しなどを行うことができる資格です。最近では図書館相互の情報交換や資料展示なども活発化し

ているため、文献情報管理の専門職としても活躍することができます。一方の司書教諭は、小・中・高等学校に教員として勤務するかたわらで、学校図書館を運営する職務です。本学では、この2つの資格取得課程を夜間に開講し、全学部・学科・学年が履修できるようになっています。

富山短期大学のサイト：<https://www.toyama-c.ac.jp/course/management/policy.html>

単位取得により取得できる資格

本学科のカリキュラムにある指定科目を規定単位数取得すると得られる資格です。

図書館司書

本学は県内唯一の司書養成機関です。司書の資格を持っていると、公共図書館のほか、学校図書館・専門図書館で司書として活躍することができます。

別府大学 司書講習のサイト：<https://www.beppu-u.ac.jp/LSS/>

本学講習の特色

別府大学は、1961（昭和 36）年から文部大臣（現：文部科学大臣）の委嘱を受けて図書館法の規定による「司書講習」を開催しています。司書とは、図書館法第 4 条に規定されている図書館の専門的職員の名称で、その資格および講習については同法第 5 条、第 6 条に規定されています。本学の司書講習の歴史は古く、科目ごとの最適任者による講師陣、宿泊施設の充実、自然に恵まれた良好な教育環境などと相まって『司書講習の別府大学』として高い評価を受けています。